学校事例 1

幅広い資質・能力の育ちを捉える パフォーマンス課題を軸に、カリマネを深化

京都府　京都市立高倉小学校

京都府京都市立高倉小学校では、「読解力」の育成に向け、学習評価を軸としたカリキュラム・マネジメントを進めている。その中でも重要な取り組みが、子ども自身が既習内容を活用して問題を解決するパフォーマンス課題だ。教員が作成する課題を通して子どもの成長を多角的に捉え、教育活動全体で PDCA サイクルを機能させている。

◎ 1995 年度、5つの小学校が統合して開校。京都市の中心部に位置する。「地域の子どもは地域で育てる」という強い理念の下、コミュニティ・スクールや小中一貫教育にも力を注ぐ。

校長　岸田蘭子先生
児童数　686 人
学級数　24 学級（うち特別支援学級２）
電話　075-211-8784
URL　http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=102803

校長
岸田蘭子
きしだ・らんこ
同校に赴任して６年目。

副教頭
八木悠介
やぎ・ゆうすけ
同校に赴任して６年目。

研究主任
福井博美
ふくい・ひろみ
同校に赴任して２年目。

教諭
谷園　淳
たにぞの・まこと
同校に赴任して２年目。
３年生担任。

カリキュラム・マネジメントの推進

年度末に指導を振り返り、単元計画を見直す

京都府京都市立高倉小学校は、学校教育目標に「よりよい生き方を求めて、誇りをもち、未来にはばたく高倉の子」を掲げ、価値ある学びと育ちができる教育を推進している。

2006年度、「読解力」の育成に着手し、授業時数を調整して同校の独自の教科「読解科」（現在は、「読解の時間」）を設定したことを契機に、単元配列表を作成してカリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）を進めている。読解力は、「課題設定力・情報活用力・記述力・コミュニケーション力」の４つの力で構成されると定義した。それらの育成に向けては教育課程全体を見直す必要があり、岸田蘭子校長はそのねらいをこう語る。

「授業時数が限られる中、教科を個別に指導していては、その効果には限界があります。『読解の時間』と各教科の学びを相互に結びつけることで効果的な教育活動ができるよう、カリマネに取り組んでいます」

「読解力」と教科の関連づけが進むにつれ、教育活動全体を通した目標・指導・評価の枠組みが明確になっていった。それらの枠組みは、評価や校内研究を通して絶えず改善に努めている。例えば、年度末には、研究主任や読解主任、重点教科の主任などで構成される研究推進部を中心に、カリキュラムやルーブリックが適切かどうかなどを議論する。読解力の４つの力が十分に育っていないなどの課題が見られれば、次年度の単元の内容や配列、授業内容を見直す。

「『もっと早い時期にこの思考ツールを教えた方がよい』『この教科のこの単元で、コミュニケーション力や記述力を養う必然性を高めたい』といった意見を交わし、カリキュラムを改善しています」（岸田校長）

パフォーマンス課題の実践

学習内容を総合的・発展的に活用できる課題を作成

評価方法として重視しているのが、算数科を中心に取り組むパフォーマンス課題だ。課題の内容は、単元を

通して身につけた資質・能力を総合的・発展的に活用できる内容として、教員が作成。子どもは、多様な考え方で課題に取り組み、結果をそれぞれの発想で表現する。研究主任の福井博美先生は、次のように説明する。

「パフォーマンス課題は、日常生活と関連づけたり、ストーリーを持たせたりして、単元の冒頭に提示します。そうすることで、子どもは、単元の最後まで学習課題に関心を持ち、課題解決のために必要な知識を自ら考えて、意欲的に学んでいきます」

パフォーマンス課題では、従来の評価の４観点のうち、特に「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」を捉えることを重視している。

「１つの課題ですべての観点を評価しようとすると、課題の焦点がぼやけてしまいます。そこで、単元ごとのペーパーテストでは知識・技能の習得を、パフォーマンス課題では知識・技能の活用を捉えるようにと使い分けています」（岸田校長）

３年生の算数「重さ」（全10時間）で行ったパフォーマンス課題を通して、子どもがどのように学び、教員は子どもの育ちをどのように捉えていったのかを見ていこう。

本単元のねらいは、単位と測定の意味を理解し、kgやｇが混在した重さの計算ができることと、物の重さを量るのに適切な計器を選び、重さを正確に量ることだ。そこで、９時間目に行うパフォーマンス課題は、「『手の感覚王はだれだ！』クイズをしよう」と題して、子どもが自宅から持ってきた物の重さを、１kgの砂袋と持ち比べて予想し、計器で量った実際の重さと予想との誤差が最も少ない物はどれかを調べるといった活動にした（**図１**）。八木悠介副教頭は、次の点を強調する。

「本校では、１つの学習がほかの教科や日常生活にも関連していることを子どもに意識させることで、幅広い資質・能力を育み、子どもの人生をより豊かにする視点を大切にしています。本単元でも、算数の重さの学習が家庭科などの他教科と関連し、日常生活にも役立つことを実感できるパフォーマンス課題にしました」

図１　３年生 算数「重さ」のパフォーマンス課題とルーブリック

◎パフォーマンス課題

重さについての学習を進め、重さ調べでだれの誤差が一番少ないかを調べる「手の感覚王はだれだ！」クイズをします。たくさんの物の重さを量って、手の感覚を身につけましょう。その時、ワークシートに量る物と選んだ計器を書き、予想した重さと実際の重さと誤差を書いてください。

ルーブリック		
	3	• 適切な計器をワークシートに記述し、重さが近い物を複数紹介している。 • 実際の重さとの誤差が少なくなるよう、量感に基づいて予想を立てることができる。 • 量る物に応じて計器を適切に選択して重さを正確に測定し、加減計算をすることができる。
	2	• 適切な計器をワークシートに記述し、重さが近い物を紹介している。
	1	**【１の子どもに対する支援】** • 学習したことを側面掲示することで、重さの単位や計算の仕方を想起できるようにする。 • 教室内に、自由に重さを量ることのできるコーナーを用意しておくことで、量感を養うことができるようにする。

＊高倉小学校提供資料を編集部で一部改変して作成。

最後まで意欲的に学べるよう単元のゴールを最初に示す

まず、単元の最初の授業では、単元の終盤に行うパフォーマンス課題を提示。子どもに「手の感覚王になりたい」という目的意識を持たせ、授業への意欲を高めた。３年生担任の谷園淳（まこと）先生は、次のように語る。

「毎回の授業では、パフォーマンス課題のゴールを話したり、黒板に書いたりして、子どもが単元を通して意欲的に学べるようにしました。また、授業で使った計器や砂袋を授業後も教室に置いたところ、休み時間にそれらを使って学習内容を確認したり、重さの感覚を養おうとしたりする子どもの姿が見られました」

そして、９時間目にそれまでの学習内容を活用し、４～５人のグループでパフォーマンス課題に取り組んだ。まずは個人ワークで、友だちが持参した３つの物について重さを予想。その重さを量るための適切な計器を４種類の中から選んで計測し、実際の重さと予想の差を計算した。例えば、「１kgの砂袋と重さが似ているから、１kg300gと予想しよう。だから、２kg用の上皿てんびんを使おう」といったように、既習事項を活用して課題に取り組んだ（**写真**）。

次に、グループ内で誤差の小さかった上位３人の数値を記入したワークシートを黒板に貼り、全グループの数値を比較。どのように重さを求めたのか、各自が工夫したことを発表し、適切な計算方法や計器の選び方などを共有した。

「前年度は、個人の感覚王を選ぶ活動のみでしたが、周りと比べて誤差

写真　単元を通して培った知識や感覚を生かし、友だちが持参した物の重さを予想して計量。誤差をできるだけ小さくしようと、子どもたちはこれまでに量った物の重さと比べながら真剣に予想し、正確に量ろうとする姿が見られた。

の大きかった子どもの学習意欲が持続しなかったと総括されていました。その課題を踏まえて、本年度は、『グループ対抗の感覚王』も設定し、子ども全員が最後まで意欲的に学べるようにしました」（谷園先生）

パフォーマンス課題の評価

ルーブリックを基に、子どもの発言や記述から成長を捉える

パフォーマンス課題のルーブリックは、子どもが学習の目的を明確に持てるよう、基本的に単元の最初に示すが、あえて提示しない場合もある。

「パフォーマンス課題は、子どもにとって評価の場であると同時に、学びそのものでもあります。ルーブリックを示し、学び方を意識させることでパフォーマンスが高まりそうな場合は、先に提示します。一方、ルーブリックを示すことで発想を限定してしまう可能性がある創作活動などでは、最後まで示さないこともあります」（岸田校長）

本単元では、単元の冒頭にルーブリックを提示後、教員は単元を通して子どもの発言やグループ内での対話の様子を捉えたり、ノートの記述や各授業の振り返りで書く内容を確認したりして評価した。例えば、谷園先生は、パフォーマンス課題の評価では、振り返りの内容を見取り、関心・意欲・態度の育ちを捉えた（**図2**）。ほかに、知識・技能の理解度を確認するペーパーテストも実施した。

同校では、読解力の育成に向けて、対話的な活動や自分の考えを記述する活動を、日常的に設定している。教員は、授業を通した一人ひとりの学びの姿を観察し、ノートや振り返りの記述、作品や作文などを通して各観点の評価を行う。

また、思考・判断・表現や関心・意欲・態度を評価する材料として、グループでの学び合いや発表などを通して、「友だちから学んで大切だと気づいたこと」を、全教科でノートに青字で書かせている（**図3**）。

「友だちの考えを聞いて、自身の考えをどのように深めているか、周囲から積極的に学ぼうとしているかといった子どもの姿を可視化しています」（福井先生）

本単元に用いた指導案やルーブリック、教材は、事後研修会のまとめとともに校内の共有フォルダに整理して次年度に引き継ぐ。次の３年生の担任は、それらの資料を見ながら、目の前の子どもの実態や課題に応じて調整し、授業を行っていく。

同校では、そうした学習評価を軸に据えた指導改善の仕組みで、カリマネを機能させている。

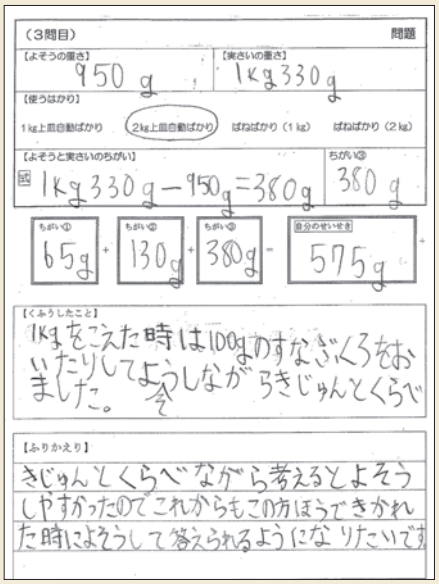
教員の評価力を高める研修体制

若手教員を対象に年10回の研修会を実施

全教員がパフォーマンス課題を活用して適切な学習評価ができるよう、校内研修にも力を注ぐ。

京都大学大学院の教育方法学講座と連携し、全教員が参加する研修を毎年実施。５月に理論を学んだ上で、年度末の２月に実際に行ったパフォーマンス課題や成果物を持ち寄り、課題やルーブリックについて検討するワークショップを開く。「課題の内容をこう変えると、子どもの意欲が高まるのではないか」「ルーブリックのこの表現を明確にした方がよい」「指示内容を変えると子どもの意識が変化してパフォーマンスが高

図2　パフォーマンス課題で子どもが記入した振り返り



[評価規準（評価方法）]

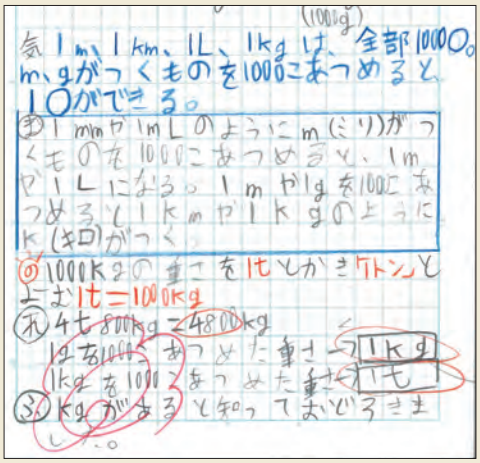
- 概ね満足できる姿（B）
  量る物に応じて重さの予想を立てて計器を選択し、重さを計測して加減計算している。
- 十分満足できる姿（A）
  量る物に応じて根拠を持って重さの予想を立て、計器を適切に選択して正確に重さを測定し、加減計算している。

[谷園先生が見取ったポイント]

単位が混在していますが、単位をそろえて、正しく計算できています。また、「くふうしたこと」では、「よそうしながらきじゅんとくらべました」という記述を評価しました。（谷園先生）

＊高倉小学校提供資料を抜粋して掲載。

図3　子どもの授業ノート



すべての教科で、友だちから学んだ気づきを青字で記入させる。友だちから学ぶことの大切さを意識させるねらいがあり、教員は思考力や学びの姿勢を評価する材料としている。　＊高倉小学校提供資料を抜粋して掲載。

まるのではないか」など、多様な意見が交わされている。

さらに、教職５年目までの教員を対象に、カリマネやパフォーマンス課題を含めた教育活動全体に関する「若手研修会」を年10回程度実施している。ほかにも、新採や異動で同校に赴任した教員を対象に、赴任直後の４月に同校の教育活動の方針を共有する場を設けている。

「授業力を高めるためには、適切な評価の視点を持つことが欠かせませんが、経験の浅い教員には難しい面もあります。そこで、公開授業の事後研修会などで、子どもの姿を通して、『こんな発言や記述に資質・能力の育ちが見られる』などを伝え合い、教員間で子どもの見方を共有しています」（八木副教頭）

３観点への対応

評価の観点が再整理された意図を校内研修で共有

新学習指導要領で観点別学習状況評価が３観点に変わることについても、学校全体で準備を進めている。2019年６月、国立教育政策研究所から『学習評価の在り方ハンドブック』が公開されたことを受け、８月に全教員参加の研修を実施した。

「評価の観点が３つになった意図を十分に理解していなければ、資質・能力を育む授業づくりはできず、また、保護者に評価の根拠を説明することもできません。『知識・理解』と『技能』が統合された意図や、『主体的に学習に取り組む態度』として評価すべき姿を始め、新学習指導要領での評価の基本方針を共有しました」（岸田校長）

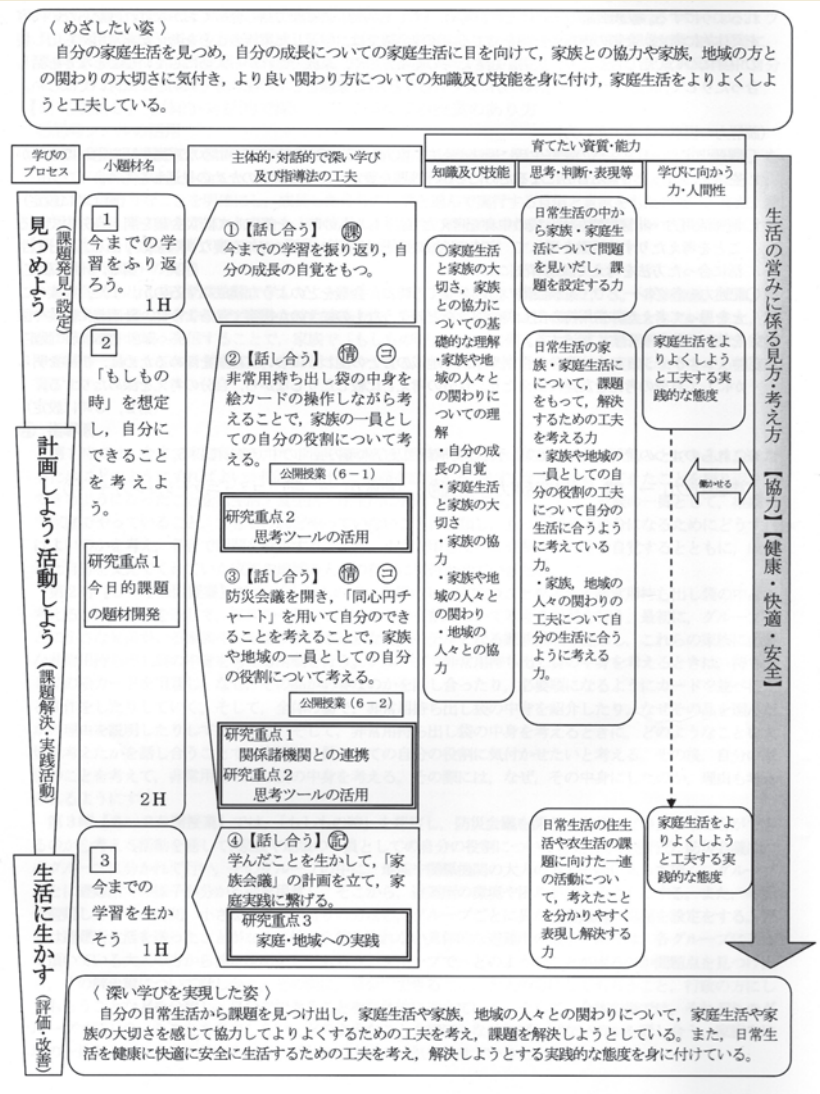
現在は、単元や授業の構造を３観点評価で捉え直す作業を進めている。10月に同校で開催した「近畿小学校家庭科教育研究会 京都大会」では、家庭科の単元の流れに沿って、育成すべき資質・能力の３つの柱を整理して示した（**図４**）。

「ここで示した『育てたい資質・能力』を裏返して捉えると、３観点の評価規準になります。次は、それぞれの資質・能力が身についたかをどのようにして測るか、方法論の検討に入っていきます」（岸田校長）

今後は、家庭科以外の教科でも３観点での捉え直しと評価方法の検討を進め、2020年２月に行う研修では３観点の授業・評価のあり方を共有する。また、今年度中には評定の方針も検討して、2020年６月までに校内・保護者に周知する方針だ。さらに、小中連携も進めていることから、地域の中学校と評価のあり方の目線合わせも行う予定だ。

「３観点を捉える上で、パフォーマンス課題は非常に有効だと考えています。より多くの教科・単元で実施するために、今後も校内研究に取り組みます。本市では、教科・領域ごとの年間指導計画・評価計画である『京都市スタンダード』を公開してきましたが、カリマネに基づくパフォーマンス課題への取り組みも全国的に発信して、これからの子どもたちに求められる学力を支える環境づくりに貢献していきます」（岸田校長）

図４ 育てたい資質・能力を整理した家庭科の題材構想



＊高倉小学校提供資料をそのまま掲載。